経済建設常任委員会だより

行政視察の実施

平成25年10月15日から18日にかけて、高知県高知工科大学、高知県馬路村、徳島県上勝町の行政視察を行いました。

■高知県高知工科大学「地域の未利用植物資源の有効活用と地域活性化について」

高知工科大学は、工学系人材の育成を目指し、高知県が設置し、私立大学として運営する公設民営大学として平成９年４月に開学しました。その後、平成21年度から地域への貢献を推し進めるために「地域連携機構」を立ち上げたことから、高知県の地域資源である自生する植物（３、１７０種の植物の宝庫）に焦点を当て研究が進められました。その中で、３００種類の植物が有用植物（医薬品や化粧品、食用などに利用できる植物）であることが見込まれ、この資源を地域活性化に活かそうと取り組んでいます。

現在、この取り組みは、地域の団体、研究機関、植物愛好家、料理研究家などが連携することで地域活性化に繋がっています。また、実際に大学研究室の関係者が経営する喫茶店（喫茶座文）でスギナやタンポポなどの地域に自生する植物を茶やカレーなどとして提供しています。

既にある地域資源に新たな価値を見い出すことで、その地域の発展や社会貢献に寄与する取り組みは、本市においても大いに参考となるものでした。

▲渡邊教授から有用植物の紹介

■高知県馬路村「馬路村農業協同組合の取り組みについて」

馬路村は、高知県の東部に位置し、１、０００ｍ級の山々に囲まれた人口わずか９５０人余り、世帯数が４５０という小さな山村です。基幹産業は林業でしたが、価格の低迷・合理化等により衰退の一途を辿っていきました。そんな中、昔から村に生育し、果汁は料理に欠かせないゆずの栽培が昭和40年頃から本格的に始まりましたが、段々畑での栽培は困難を要し、また、無骨な形で見栄えが悪かったことで販売は低迷していました。

青果物としての低評価を補うために、馬路村農業協同組合が起死回生に打って出たのが、ゆずを加工して販売することでした。ゆずの果汁を利用した加工品としてゆず酢、ゆず佃煮、ゆずジャム、ゆず味噌などの生産に着手し、主力商品の一つである濃縮ジュース「ごっくん馬路村」は人気商品となり、現在では、ゆずの香りを活かした入浴剤や化粧水などに広がり、通信販売・物産展等での販売は30億円を突破し、ゆずのブランド化に成功しています。ブランド化や農業の６次産業化など本市の直面する課題に、示唆を与えるものでした。

▲ゆずの森加工場

■徳島県上勝町「彩（いろどり）事業について」

上勝町は、徳島市中心部から約１時間の場所に位置し、人口１、８００人余り、高齢化率約50％という過疎高齢化の町です。主な産物は木材・みかんでしたが、１９８１年に発生した異常寒波でみかんのほとんどが渇死。農業は大打撃を受けました。この危機を乗り切るために、軽量野菜を中心に農業の再編成を行い、さらに新たな産業育成を目指し、町の人口の半数以上を占めるお年寄りが活躍できる仕事を模索中、「葉っぱビジネス」を考案しました。これは日本料理を美しく彩る紅葉や笹、梅、紫陽花などの季節の葉や花、または山菜などを市場に出荷する事業で、女性や高齢者でも取り組めるビジネスです。

現在、この「葉っぱビジネス」の年商は約２億６、０００万円、小さな町が活気を取り戻し、全国から注目を浴びています。

▲彩事業についての説明